OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	八丈方言のアスペクト・テンス・ムード
Author(s)	工藤, 真由美
Citation	阪大日本語研究. 2000, 12, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10063
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『阪大日本語研究』12（2000）

八丈方言のアスペクト・テンス・ムード

Aspect, Tense and Mood in the Hachizjo Dialect

工藤真由美
KUDO Mayumi

キーワード：断定法、話し手の直接知覚、現在に関係づけられた過去、現在に関係づけられた未来、パーフェクト、将前

【要旨】

八丈方言のアスペクト・テンス体系には、新しい層と古い層とが、中心的なものと周辺的なものとして存在する。新しい層では、＜進行＞と＜結果＞とが、標準語と同様に１つの形式に統合化されているが、古い層では西日本諸方言と同様に、異なる形式で表現される。新しい層でも古い層でもムードとの結びつきがみられるが、特に古い層の形式には、話し手の直接的知覚という限定がある。２つの層の記述を行なうと同時に、＜進行＞か＜結果＞かというアスペクト対立から、＜未来＞か＜過去＞かというテンス対立への歴史的な発展経路を、＜将前＞と＜パーフェクト＞という中間段階を設定しつつ考えてみる。

Ⅰ　はじめに

（Ⅰ・１）日本語では基本的に「人の存在」を表す動詞が有標のアスペクト形式として文法化される。例えば、次のように。

標準語「イル」	スルーシテイル
三重県津方言「オル」	スルーシトル
愛媛県宇和島方言「オル」	スルーシヨルーシトル
和歌山県田辺方言「アル」	スルーシヤルーシタール

現在、西日本諸方言の実態記述は進んでいるが、東日本諸方言については、東北南部以外あまり十分な体系的記述がなされていないように思われる。そのため、不十分ではあるが、工藤1999で青森県五所川原方言のアスペクト・テンス体系の記述を試みた。

五所川原方言の特徴は＜継続相・過去＞の意味でシテアッタ形式が使用されることにあるのだが、人の存在動詞としてはアルではなく、イルが使用されるようになっている。この意味で、本動詞とアスペクト形式との対応がなくなっていて、今後の大きな変化が予想されるのであ

る。

では、東日本諸方言のなかに、人の存在動詞としてアルを使用し、従って、アスペクト形式としてもアルが文法化されている方言はないのであろうか？　現在、東北諸方言にはこのような方言は見つかっておらず、唯一、八丈方言がこのような体系をもっている。

本稿では、この八丈方言の記述を試みることにしたい。

（Ⅰ・2）八丈方言の中核的体系は次のようである。なお、ノマラ形式は標準語のシタ形式と同様に＜完成・過去＞と＜パーフェクト・現在＞の意味を表すが、ノマララ形式は＜完成・過去＞の意味だけを表す[1]。

「人・ものの存在動詞」

未来	アロワ
現在	アロワ
過去	アララ

「運動動詞」

テンス＼アスペクト	完成	継続
未来	ノモワ	ノンデアロワ
現在	－	ノンデアロワ
過去	ノマラ ノマララ	ノンデアララ

アスペクト形式として、イルではなくアルが採用されている点を別にすれば、中核的体系自体は標準語に極めて近いのであるが、八丈方言のアスペクト・テンス体系はこのような単純な分析ではとらえきれない、極めて興味深い様相を呈している。八丈方言のアスペクト・テンス体系の精密な記述は、日本語のアスペクトとテンスの歴史的変化の問題を考えるにあたって、さらにはそれに絡み合うムードとの相関性を考えるにあたっても重要であると思われるのである。

今回、金田章宏氏、奥山熊雄氏の全面的協力を得て、八丈方言調査を行なうことができた。インフォーマントは現在83歳の奥山熊雄氏（八丈町三根）であるが、奥山氏の年令を考え、またこの地域でも急速な標準語化が進んでいることを考えて、いまだ全く不十分なのではあるが、中間報告として本稿を作成した次第である[2]。

以下、Ⅱでは、新しい体系であると思われる、上述したような、有標の分析的形式によるアスペクト・テンス体系について記述し、Ⅲでは、より古いアスペクト・テンス形式の存在について記述する。そしてⅣにおいて、古い層と新しい層との2層構造をなす、八丈方言の歴史的変化の問題について考えてみる。

Ⅱ　中核的なアスペクト・テンス体系とムード

（Ⅱ・1）この方言には、基本的にムードの違いに相関する2つの系列がある。前述した中核的体系はムード的に最も基本的な＜叙述法・断定＞におけるパラダイムである。一方、次のようなパラダイムは＜選択質問法＞と＜叙述法・推量＞で使用される。＜選択質問法＞の場合は単独で使用するが、＜推量＞の場合は「ダロウ（ロウ）」「ノウワ」を伴う。（なお、終助詞「ノー」を伴った場合には＜断定＞でも使用することができる。）

未来	アル（ダロウ）（↗）
現在	アル（ダロウ）（↗）
過去	アッタ（ロウ）（↗）

テンス＼アスペクト	完成	継続
未来	ノム（ダロウ）（↗）	ノンデアル（ダロウ）（↗）
現在	－	ノンデアル（ダロウ）（↗）
過去	ノンダ（ロウ）（↗） ノンダッタ（ロウ）（↗）	ノンデアッタ（ロウ）（↗）

それぞれのアスペクト・テンス的な意味・用法は対応しているのだが、次に例示するように、「問い」の場合に、「ノモワ、ノマラ、ノマララ、ノンデアロワ」は使用できないし、逆に「答え」の場合に「ノム、ノンダ、ノンダッタ、ノンデアル」は使用できない。また、「ノンデアロ（ワ）ダロウ」というような言い方はない。

・「酒イ、飲ムー？」「オイ、飲モワ」
　（「酒を、飲むか？」「うん、飲む（よ）」）
　「ハー、酒イ、飲ンダ？」「ハー、飲マラ」
　（「もう、酒を飲んだか？」「もう、飲んだ（よ）」）
　「ウノトキ、酒イ、飲ンダッタ（飲ンダ）？」「オイ、飲マララ（飲マラ）」
　（「あの時、酒を飲んだ？」「うん、飲んだ（よ）」）

・「トトウワ、酒イ、飲ンデアロワ」
　（お父さんは、酒を、飲んでいるよ）
　「トトウワ、酒イ、飲ンデアルダロウ」
　（お父さんは、酒を、飲んでいるだろう）
　「トトウワ、酒イ、飲ンダロウ」

（お父さんは、酒を、飲んだだろう）

なお＜疑問詞質問法＞の場合は、以上の形式は使用できず、次のようになる[3]。

・「アニョ、飲モ？」「酒イ、飲モワ」

（「何を、飲む？」「酒を飲む（よ）」）

「アニョ、飲モー？」「酒イ、飲マラ」

（「何を、飲んだ？」「酒を、飲んだ（よ）」）

選択質問法の場合と違って、「アニョ、飲ンダ？」と言うと、標準語的言い方になる。また、「アニョ、飲ムー？」と言う場合には、相手に「何を飲むか？」と尋ねる意味ではなく、「話し手と相手が一緒に、何を飲もうか？」と相談する意味になる。従って、典型的な疑問詞質問法ではない。

以上のように、ムードの違いと相関して2つの系列があるのであるが、アスペクト・テンス的意味は基本的に同じである。従って、以下ではムード的に最も基本的な＜叙述法・断定＞におけるアスペクト・テンス体系について記述することにする。

（Ⅱ・2）前述したように、八丈方言の存在動詞はアル（アロワ）のみである。オルは（現在ではほとんど）使用されず、イル（イロワ）は「座る」の意味であるので、主体変化動詞として、アロワと異なり、次のようなノモワと同じアスペクト・テンス対立をもつ。

テンス＼アスペクト	完成	継続
未来	イロワ	イテアロワ
現在	－	イテアロワ
過去	イタラ イタララ	イテアララ

なお、八丈方言の＜完成相過去＞の形式的側面は、動詞によって、次のように異なっている。

強変化動詞　［nomara］（飲む）← ［nomi-aro-wa］／akara（開く）

弱変化動詞　［itara］（座る）← ［i-te-aro-wa］／aketara（開ける）

（Ⅱ・3）＜動作継続＞＜結果継続＞という基本的意味のみでなく、＜パーフェクト＞＜反復習慣＞という派生的意味をも含めて、＜主体動作動詞＞＜主体動作客体変化動詞＞＜主体変化動詞＞に分けて記述すると、次のようになる。ここで、動詞のタイプ別にパラダイムを示すのは、次のⅢでの古い層の記述のためにも必要であるからである。実際の調査票では3つのタイプの動詞をそれぞれ複数取り上げているが、ここでは代表例として「飲む」「開ける」「開く」を提示する。（－は使用されないこと、＊は場面設定が難しく確認しきれなかったことを示す。）

主体動作動詞（飲む）

テンス＼アスペクト	完成	継続	パーフェクト（効力）	反復習慣	恒常性
未来	ノモワ	ノンデアロワ	*	ノモワ	ノモワ
現在	−	ノンデアロワ	ノマラ	ノモワ ノンデアロワ	
過去	ノマラ ノマララ	ノンデアララ	*	ノマラ ノマララ ノンデアララ	

主体動作客体変化動詞（開ける）

テンス＼アスペクト	完成	継続	パーフェクト（効力）	反復習慣	恒常性
未来	アケロワ	アケテアロワ	*	アケロワ	アケロワ
現在	−	アケテアロワ	アケタラ	アケロワ アケテアロワ	
過去	アケタラ アケタララ	アケテアララ	*	アケタラ アケタララ アケテアララ	

主体変化動詞（開く）

テンス＼アスペクト	完成	継続	パーフェクト（効力）	反復習慣	恒常性
未来	アコワ	アッテアロワ	*	アコワ	アコワ
現在	−	アッテアロワ	アカラ	アコワ アッテアロワ	
過去	アカラ アカララ	アッテアララ	*	アカラ アカララ アッテアララ	

（Ⅱ・4）それぞれの形式の意味用法の概略を示すと次のようになる。

①ノモワ、アケロワ、アコワは、標準語のスル形式と同じアスペクト・テンス的意味を表す。「ヒトワ、マルボワ（人は死ぬ）」のような＜恒常性＞を表すのもこの形式である。

②ノマラ、アケタラ、アカラは、標準語のシタ形式と同じアスペクト・テンス的意味＜

完成・過去＞＜パーフェクト・現在＞＜反復習慣・過去＞を表す。

③ノマララ、アケタララ、アカララは、標準語のシタ形式と違って＜パーフェクト・現在＞を表さず＜完成・過去＞＜反復習慣・過去＞の意味だけを表す。そして、ノマラ等と異なり、「マン（今）」と共起することもできない。（＊は使用できないことを示す。）

・「酒イ、ハー、飲マラ（＊飲マララ）」（酒をもう飲んだ）
「マン、窓ウ、開ケタラ（＊開ケタララ）」（今、窓を開けた）

・「ハンズメ、窓ウ、開ケタラ（開ケタララ）」（さっき、窓を開けた）
「キネイワ、窓ウ、開ケタラ（開ケタララ）」（昨日は、窓を開けた）

④ノンデ（アケテ、アッテ）アロワ形式、ノンデ（アケテ、アッテ）アララ形式のアスペクト的意味は、基本的に標準語と同じではあるが、次の点で異なる。（これは、五所川原方言、南陽方言とも共通する。）[4]

（言語） 動詞のタイプ	標準語	八丈方言 五所川原、南陽方言
主体動作動詞 飲む等	動作継続	動作継続 痕跡
主体動作客体変化動詞 開ける等	動作継続	動作継続 結果継続
主体変化動詞 開く等	結果継続	結果継続 （変化進行）

＜主体動作動詞＞は、基本的に＜動作継続＞を表すが、＜痕跡＞を表せる場合もある。後述するが、古い形式では、基本的に、＜動作継続＞は「ノモウ」「ノモジャ」で、＜痕跡＞は「ノマロウ」「ノモージャ」で区別される。

・トトウガ、酒イ、飲ンデアロワ。＜動作継続＞

・［お父さんの顔が赤くなっていたり、酒びんが空になっているのを見て］
トトウガ、酒イ、飲ンデアロワ。＜痕跡＞

＜主体動作客体変化動詞＞は、基本的に＜主体の動作継続＞を表すが、＜客体の結果継続＞も表すことがある。後述するが、古い形式では＜動作継続＞は「アケロウ」「アケロジャ」で、＜結果継続＞は「アケタロウ」「アケトージャ」で区別される。

・太郎ガ、窓ウ、開ケテアララ。＜動作継続＞＜結果継続＞
生徒ガ、黒板ヨ、消シテアロワ。＜動作継続＞＜結果継続＞

＜主体変化動詞＞は、基本的に＜結果継続＞を表すが＜変化進行＞も表しうる。（ただし、「死ぬ、電気が消える」のように、動的な変化過程を表しにくいものは不可能である。）この両

者も古い形式では＜変化進行＞は「アコウ」「アコジャ」で、＜結果＞は「アカロウ」「アコージャ」で区別される。

・窓が開ッテアララ。＜結果継続＞＜変化進行＞

（窓が開いていた、開きつつあった）

石ガ、ママカー、ブコテテアロワ。＜結果継続＞＜変化進行＞

（石が崖から落ちている、落ちつつある）

・金魚ガ、マルンデアロワ。＜結果継続＞

（金魚が死んでいる）

電気ガ、トンデアララ。＜結果継続＞

（電気が消えていた）

なお、以上の形式は、「コノ道ワ、ヒンマガッテアロワ（この道は曲がっている）」のような＜恒常的状態＞をも表す。が、いわゆる「経験記録」のような＜動作パーフェクト（効力）＞をも表すかどうかは微妙である。動詞によっては可能なようであるが、確実にそうかどうかは断定できない。次の場合「マルバラ」「マバララ」のような形式の方が自然に使われるようである。

・トトウワ、５年メーニ、マルンデアロワ。

（お父さんは５年前に死んでいる）

太郎ワ、ハー、ソノテレビョ、マバッテアロワ。

（太郎はそのテレビドラマをもう見ている）

以上のように、新しい体系では、基本的には、標準語と同様な＜完成相＞＜継続相＞の２項対立型のアスペクト体系になっているといえよう。

ところが、次に示すように、古い諸形式では異なる様相をみせる。これらの諸形式は、もはや中年層では確認できにくい形式となっているようである。

Ⅲ　周辺的なアスペクト・テンス形式

（Ⅲ・１）以上のような中核的アスペクト・テンス形式の周辺には、次のような古いアスペクト・テンス形式が残存している。この古い形式では、運動動詞において、＜進行＞と＜結果＞とが異なる形式で表されることが大きな特徴である。（なお、この古い形式は＜反復習慣＞＜恒常性＞の意味は表さないようである。）

この古い形式には、次の２つの系列がある。

(a)テンス的に＜現在＞に限られているもの

アロウ（アラロウ）

ノモウ／ノマロウ、アケロウ／アケタロウ、アコウ／アカロウ

(b)テンス的に現在に限られていないもの

アロジャ／アロージャ

ノモジャ／ノモージャ、アケロジャ／アケトージャ、アコジャ／アコージャ

それぞれの形式の意味用法の概要をまず図式化して示すと次のようになる。

存在動詞

未来	アロジャ	－
現在	アロジャ	アロウ アラロウ
過去	アロージャ	－

主体動作動詞（飲む）

テンス＼アスペクト	完成	進行・将前	結果・痕跡	動作パーフェクト（効力）
未来	ノモジャ	－	－	－
現在	－	ノモジャ	ノモージャ	ノモージャ
		ノモウ	ノマロウ	
過去	ノモージャ ノマロージャ	－	－	－

主体動作客体変化動詞（開ける）

テンス＼アスペクト	完成	進行・将前	結果・痕跡	動作パーフェクト（効力）
未来	アケロジャ	－	－	－
現在	－	アケロジャ	アケトージャ	アケトージャ
		アケロウ	アケタロウ	
過去	アケトージャ アケタロージャ	－	－	－

主体変化動詞（開く）

テンス＼アスペクト	完成	進行・将前	結果・痕跡	動作パーフェクト（効力）
未来	アコジャ	−	−	−
現在	−	アコジャ	アコージャ	アコージャ
		アコウ	アカロウ	
過去	アコージャ アカロージャ	−	−	−

（Ⅲ・2）まず、テンス的に＜現在＞に限定され、しかもムード的に＜話し手の直接的知覚＞を表すという意味で、最も古い意味を表すと思われる(a)の系列の意味用法について記述する。

この形式の意味用法については、既に金田1990があり、詳しく記述されているのだが、今回の調査によってやや修正すべき点も出てきたので、ここで記述しておくことにする。

まず、ノモウ、アケロウ、アコウは、次の場合に使用される。

①＜（動作・変化の）進行＞を＜話し手が直接知覚＝発見＞し、同時に＜驚き・呆れ・怒り＞などの感情・評価性をもって発話する。1人称の場合は不可であって、3人称の場合である。話し手が知覚していない場合には使えない。

主体動作動詞、主体動作客体変化動詞では＜動作進行＞を、主体変化動詞では＜変化進行＞を表す。

・トトウガ、酒イ、飲モウ！　（あ、お父さんが酒を飲んでいる！）
　太郎ガ、窓ウ、開ケロウ！　（あ、太郎が窓を開けている！）
・バー、窓ガ、開コウ！　（まあ、窓が開きつつある！）
　太郎ガ、隣ノエン、ヘーロウ！（あ、太郎が隣の家に入りつつある！）

＜変化進行＞は変化過程が短いものであってもよい。次のような場合、シテアロワ形式では言いにくいが、この形式では可能である。

・太郎ガ、イロウ！　（あ、太郎が椅子に座りつつある！）
　電気ガ、トモウ！　（あ、電気が消えていきつつある！）

②主体動作動詞、主体動作客体変化動詞では＜将前＝兆候の知覚に基づく以後の動作成立の推論＞をも表す。アコワのような主体変化動詞にはこの、＜開始前の段階＞を表す用法はないが、これは後述するアカロウに＜開始後の段階＞を表す用法がないことと対応している。

・トトウガ、酒イ、飲モウ！

［お父さんが盃を口にもってきつつあるのを見て感情・評価的に発話］

・太郎ガ、窓ウ、開ケロウ！

［太郎が窓に手をかけているのを見て非難などの感情をこめて発話］

なお、八丈方言のこの形式による＜将前＞用法は、宇和島方言とは違って、＜開始直前＞であって＜動作の実現に対する話し手の確信度が高い＞場合しか言えない。例えば、「冷蔵庫からビールを出している」「酒ビンの栓を抜いている」ような場面では「ノマイゲナー」「ノモーシャーテショウ」「ノモーシャーテシテアロワ」の形式を使用しなければならないようである。一方、後述する、＜話し手の直接的知覚＞に無関心な(b)系列のノモジャ、アケロジャ等の形式の使用は可能である。

次に、ノマロウ、アケタロウ、アカロウは次のように使用される[5]。

③主体動作の場合は＜痕跡＞、主体動作客体変化動詞と主体変化動詞の場合は＜結果＞＜痕跡＞を＜話し手が直接知覚＝発見＞し＜感情・評価的＞に発話する。この場合は3人称に限定される。また、＜痕跡＞の場合はその出来事が起こったことに対する＜話し手の確信度が高い＞場合に限定される。確信的でない場合には「ノマイゲナロウ！」が使用される。後述するノモージャの形式は使うことができる。（以下の4番目の例のように、視覚によらない場合であってもよい。本稿で＜知覚＞の用語を使用しているのは、このような触覚による場合もあるからである。）

・トトウガ、酒イ、飲マロウ！　＜痕跡＞

［お父さんの顔が赤い、あるいは酒が無くなっているのを見て］

・太郎ガ、窓ウ、開ケタロウ！　＜結果＞＜痕跡＞

［窓が開いている、あるいは窓は閉まっているが汚れているのを見て］

・窓ガ、開カロウ！　＜結果＞＜痕跡＞

［窓が開いている、あるいは今は閉まっているが部屋の中に木の葉が入っているのを見て］

太郎ガ、イタロウ！　＜結果＞＜痕跡＞

［太郎が座っている、あるいはもう座っていないが座布団が暖かいのに気づいて］

太郎ガ隣ノエン、ヘーラロウ！＜結果＞

［太郎が隣の家に入っているのを見て］（＜痕跡＞は想定しにくい）

④主体動作動詞、主体動作客体変化動詞の場合には＜動作進行＝開始後の段階＞をも表す。ただし、主体変化動詞は＜変化進行＞を表さない。（これは主体変化動詞アコウ

において＜将前＞の意味が表せないことと対応している。）やはり＜直接的知覚＝発見＞＜感情・評価性＞の意味を伴う。従って、この場合は、ノモウとノマロウ、アケロウとアケタロウが競合することになる。

・トトウガ、酒イ、飲マロウ！　＜動作進行＞

（あ、お父さんが（飲んではいけない）酒を飲んでいる！）

・太郎ガ、窓ウ、開ケタロウ！　＜動作進行＞

（太郎が窓を開けている！）

⑤以上はすべて3人称の場合だが、1人称の場合には、＜発見・気づき＞の意味が前面化することになる。

・太郎ガ、寝タロウ！　＜結果＞

［太郎（3人称）が熟睡しているのを目撃して］

・バー、寝タロウ！

［はっと目が覚めて、自分が寝ていたことに気づいて］

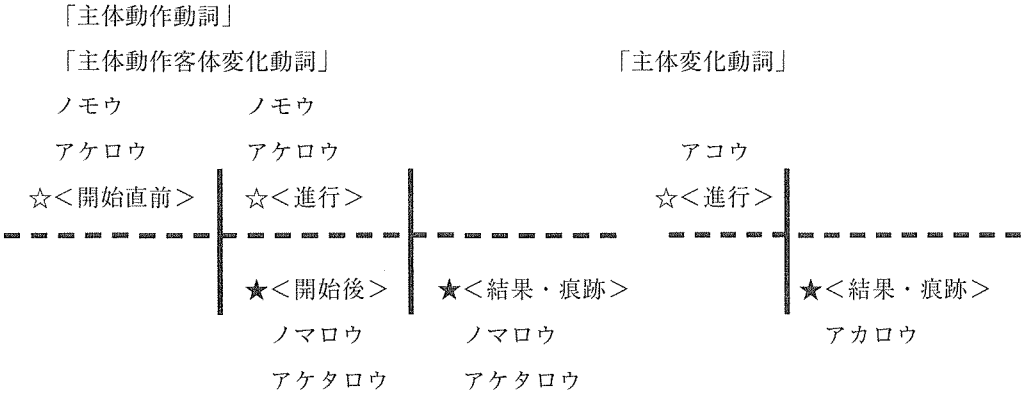
キー、ヘイテイ、飲マロウ！

［時計を見て、ずいぶん長い間飲んでいることに気づいて］

キー、コーダケ、エーマロウ！

［おしゃべりをやめた瞬間、こんなにも歩いていることに気づいて］

以上をまとめると次のようになる。



基本的に2つの形式は＜限界達成前の段階＞（☆）か＜限界達成後の段階＞（★）かで対立している。そして＜動作＞を捉えている場合には＜終了限界＞のみならず＜開始限界＞も問題となるので、＜進行＞と＜結果・痕跡＞で対立するのみならず、＜将前＝開始直前段階＞と＜

開始後段階＞でも対立することになる。しかし、「開く」のように＜動作＞を捉えていない場合には＜開始限界＞が問題とならないので＜開始直前＞か＜開始後＞かの対立はない[6]。

なお、存在動詞アロウ、アラロウの場合はアスペクト対立を示しえない。どちらも標準語の「あった！」「いた！」に相当するような＜発見・気づき＞の意味で使用される。

そして、ノンデアロウ、アケテアロウ、アッテアロウのような形式が使用されることもある。ノンデアロワの場合と違って、＜話し手の直接的知覚＝発見＝感情・評価性＞のムード的意味を伴って使用される。

（Ⅲ・3）次に(b)系列の形式について記述することにする。

まず、ノモジャ、アケロジャ、アコジャ形式の意味用法は次のようである。

①＜（動作・変化）進行・現在＞の意味を表すが、＜話し手の直接的知覚＞でなくてよい。＜話し手の感情・評価性＞もつきまとわない。従って人称制限はない。ノンデアロワ、アケテアロワ、アッテアロワと競合する。＜変化進行＞の場合は、アッテアロワよりもアコジャの方が使用されやすい。

・窓ガ、開コジャ。　＜変化進行＞（窓が開きつつある）
太郎ガ、イロジャ。＜変化進行＞（太郎が座りつつある）

②＜将前＝近未来＞の意味も表すが＜兆候の知覚＞がなくてもよい。従って、この場合も人称制限はない。「お父さんが冷蔵庫からビールを出している」ような場面では、ノモジャを使用する。（ノモウは、＜直前＞ではないので使用できない。）

・トトウワ、酒イ、飲モジャ。（お父さんは酒を飲もうとしている）
・窓ガ、開コジャ。［窓が風でガタガタしているような場合］
金魚ガ、マルボジャ。［金魚が口をパクパクしているような場合］

③さらに＜完成・未来＞も表す。この場合、ノモワとノモジャ、アケロワとアケロジャ、アコワとアコジャが競合することになる[7]。

・アラ、ケイモ、ヨウケノ時ニ、酒イ、飲モジャ。
（私は今日も夕食の時に酒を飲むよ。）

次に、ノモージャ、アケトージャ、アコージャ形式の意味用法は次のようである。

④＜結果・現在＞を表すが＜話し手の直接的知覚＞でなくてもよい。＜話し手の感情・評価性＞もつきまとわない。＜痕跡・現在＞も表すが、＜感情・評価性＞はない。＜動作進行＝開始後の段階＞は表さない。ノンデアロワ、アケテアロワ、アッテアロワと競合するが、＜痕跡＞の場合は、ノモージャ、アケトージャ、アコージャの方が使われやすい。

・太郎ガ、酒イ、飲モージャ。＜痕跡＞

［帰宅した時、酒びんが空になっているのを見て］

・太郎ガ、窓ウ、開ケトージャ。＜結果＞＜痕跡＞

［窓が開いている場合、窓は閉まっているが汚れている場合］

⑤＜動作パーフェクト（効力）・現在＞を表す。従って、この場合は、ノマラ、アケタラ、アカラと競合する。(a)系列のノマロウ、アケタロウ、アカロウは、＜結果・痕跡＞は表せても＜動作パーフェクト（効力）＞は表せない。＜結果・痕跡＞は＜知覚＞できるが＜効力＞は知覚できないからである。（ただし、次の例の「キトージャ」と「キタラ」はモーダルな意味まで同じというわけではない。前者は「来たねえ」後者は「来たよ」と標準語訳できるような意味になるようである。）

・「ハー、酒イ、飲ンダ（飲モーカ）？」

「オイ、ハー、飲モージャ（飲マラ）」

（「もう酒を飲んだか？」「うん、もう飲んだ」）

・熊チャンモ、マン、キトージャ（キタラ）。（熊ちゃんも今来た）

⑥＜完成・過去＞をも表す。従って、この場合も、ノマラ、アケタラ、アカラと競合する。

・「ウノトキ、酒イ、飲ンダ（飲モーカ）？」

「オイ、飲モージャ（飲マラ）」

（「あの時酒を飲んだか？」「うん、飲んだ」）

・熊チャンモ、ウノトキ、キトージャ（キタラ）。

（熊ちゃんもあの時来た）

さらに、ノマロージャ、アケタロージャ、アカロージャ形式があるが、これらの意味用法は、ノマララ、アケタララ、アカララと同じく＜完成・過去＞だけである。

また、ノンデアロジャ、アケテアロジャ、アッテアロジャのような形式、ノンデアロージャ、アケテアロージャ、アッテアロージャのような形式が使用される場合もある。前者は、ノンデアロワ等と同じ非過去形であり、後者はノンデアララ等と同じ過去形である。

Ⅳ　おわりに―歴史的発展のプロセスをめぐって―

以上、次の点を述べた。

①八丈方言のアスペクト・テンス体系には、新しい層と古い層の２つの層が、中核的なものと周辺的なものとして存在している。

②新しい有標のアスペクト形式は分析的形式であって、＜進行＞と＜結果＞とが１つの形式

に統合化されているが、非分析的な古いアスペクト形式は、両者が異なる形式で表される。

③八丈方言のアスペクト・テンス体系は、どちらの層においても、ムードと相関している。新しいものでは、＜断定法＞の場合とそうではない場合では異なる形式を使用するし、古いものでは、＜話し手の直接的知覚＞との結びつきがみられる。

さて、以上の諸形式の意味・用法を次のように図式化してみることにする。新しく生成したと思われる分析的なノンデアロワ（アララ）については、ひとまず除いておく。

第１系列のものは存在動詞アリが接続していない＜非アリ＞系列である。第２系列のものは、存在動詞アリが接続している（と思われる）ものである。

【第１系列】

ムード／テンス／アスペクト	直接知覚可能		直接知覚不可能（推論、意志）
テンス	現在 ➡	近未来（現在に関係づけられた未来） ➡	未来
アスペクト	進行 ➡	将前 ➡	完成
ノモワ	－	－	◎
ノモジャ	◎	◎	◎
ノモウ	◎	○	－

【第２系列】

ムード／テンス／アスペクト	直接知覚可能		直接知覚不可能（推論、記憶再生）	
テンス	現在 ➡	現在に関係づけられた過去 ➡		過去
アスペクト	結果 ➡	痕跡 ➡	効力 ➡	完成
ノマラ	－	－	◎	◎
ノモージャ	◎	◎	◎	◎
ノマロウ	◎	◎	－	－
ノマララ	－	－	－	◎
ノマロージャ	－	－	－	◎

＜非アリ＞系列と＜アリ＞系列の諸形式の意味用法の分布をみると、次のような発展経路が想定できそうに思われる[8]。

＜非アリ＞系列の諸形式の中核的形式は「ノモワ、アケロワ、アコワ」である。この形式は、基本的に＜完成・未来＞は表しても＜進行・現在＞は表さない点で、標準語のスル形式と同じである。ところで、古代日本語ではこの基本形であるスルがテンス的に＜現在＞を表していた

ことは既に指摘されている。八丈方言の＜進行・現在＞を表す「ノモウ、アケロウ、アコウ」が＜話し手の直接的知覚＞の場合に使われるという点でも古い用法だとすれば、そして「ノモジャ、アケロジャ、アコジャ」が＜進行・現在＞＜将前・近未来＞＜完成・未来＞のすべてを表せるとすれば、八丈方言の＜非アリ＞系列の諸形式は、古い段階から新しい段階までの発展プロセスを示しているように思われる。

そしてその発展経路はアスペクト的には＜進行＞➡＜将前＞➡＜完成＞であり、このアスペクト的意味に連動してテンス的にも＜現在＞➡＜近未来＝現在に関係づけられた未来＞➡＜未来＞であろう。＜将前・近未来＞は、＜進行・現在＞から＜完成・未来＞へと展開していく時の＜中間段階＞として位置づけられるのである。

そしてこの発展経路にはムード的には＜話し手の直接的知覚＞という最も原初的な＜確認の仕方＞から、そうではないものへの発展が相関している。ノモウは＜進行＞というアスペクト的意味と＜現在＞というテンス的意味と＜話し手の直接的知覚による確認＞というムード的意味とが三位一体的にむすびついているという意味で、アスペクト、テンス、ムード分化の出発点的姿を示しているように思われる。

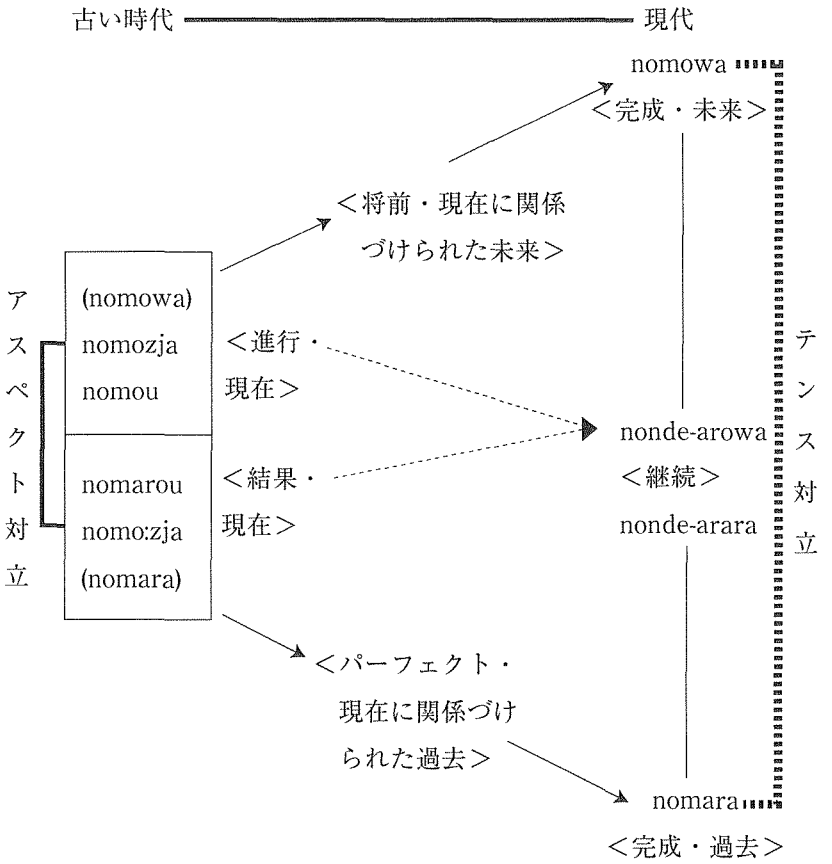
一方、＜アリ＞系列の諸形式の中核的形式は「ノマラ、アケタラ、アカラ」である。この形式は＜完成・過去＞と＜動作パーフェクト・現在＞を表す点で標準語のシタ形式に等しい。ところでこのシタ形式が古代日本語ではアスペクト形式であったことは既に指摘されている。八丈方言の＜結果・現在＞を表す「ノマロウ、アケタロウ、アカロウ」が＜話し手の直接的知覚による確認＞の場合に使われる点でも古い用法だとすれば、そして「ノモージャ、アケトージャ、アコージャ」が＜結果・現在＞から＜完成・過去＞に至るまでの過渡的段階をすべて表しうるとすれば、発展経路が＜非アリ＞系列と平行的に（鏡像的に）考えられることになろう。アスペクト的には＜結果（状態パーフェクト）＞➡＜痕跡（動作パーフェクト）＞➡＜効力（動作パーフェクト）＞➡＜完成＞であろう。そしてこのアスペクト的意味に連動して、テンス的には、＜現在＞➡＜現在に関係づけられた過去＞➡＜現在と切り離された過去＞と発展していくことになる。＜痕跡・現在と関係づけられた過去＞＜効力・現在と関係づけられた過去＞は、＜結果・現在＞から＜完成・過去＞へと展開していく時の＜中間段階＞として位置づけられる[9]。

そしてこの発展経路にはムード的には＜話し手の直接的知覚による確認＞という最も原初的な確認の仕方からそうではないものへの発展が絡み合っている。

＜完成・未来＞を表す「ノモワ、アケロワ、アコワ」と＜完成・過去＞を表す「ノマラ、アケタラ、アカラ」という中核的形式は、最初は、「ノモウ」や「ノマロウ」と同様に＜進行・現在＞と＜結果・現在＞のアスペクト対立をなしていたのではないだろうか？

このアスペクト対立が、＜話し手の直接的知覚＞という＜人称＞とも絡み合うムード的限定から解放されつつ、一方は＜将前・近未来＞の段階を経て＜未来＞へ、他方は＜パーフェクト・現在に関係づけられた過去＞の段階を経て＜過去＞へと発展していって、両者がアスペクト対立ならぬテンス対立を形成したとすれば、新たなアスペクト形式が必要となってきて「ノンデアロワ」のような＜分析的形式＞が成立してくることになるであろう。この２つの流れは徐々に＜同時進行＞していったのであろう。現在では、Ⅱで示したような中核的アスペクト・テンス体系が成立しているが、同時に、古い層として、非アリ系列の、あるいは＜非分析的＞なアリ系列の形式が、古い意味用法を残存させてもいるのが八丈方言の特徴であると思われる。（下図参照）

この際、＜進行＞＜結果＞や＜現在＞＜未来＞＜過去＞といった＜単純な＞アスペクト的意味やテンス的意味のみならず、＜将前＝現在に関係づけられた未来＞＜パーフェクト＝現在に関係づけられた過去＞といった＜複合的な＞アスペクト・テンス的意味を、中間段階に位置づ



けておくことが、アスペクト対立からテンス対立への発展経路の説明として重要だと思われるのである。＜進行（現在）＞と＜（完成）未来＞、＜結果（現在）＞と＜（完成）未来＞という単純な（従って基本的な）意味は、文法的発展の出発点と到達点である。（このような中間段階をも設定しつつ発展経路を考えていくあり方は最近では参考文献にあげたBybee1994が詳しい。）

＜将前＞＜パーフェクト＞は複合的な意味を表すがゆえに、アスペクト対立からテンス対立への転換点として機能する。この中間段階を設定しなければ、アスペクト対立からテンス対立への進展プロセスを十分には説明できないように思われるのである。（西日本諸方言を例としての、この点についてのもう少し厳密な説明は、工藤2000ｂを参照されたい。）

以上、八丈方言を例として、アスペクト・テンス体系の発展経路を、仮説として考えてみた。今後、様々な諸方言の実態記述が進むなかで、このような観点の精密化が行なわれていくであろう。八丈方言についても、なお、残存しているキ、ケリにさかのぼる（と思われる）形式の位置づけなど今後のより厳密な記述が必要である。すべては今後の課題としたい。

【注】

1）いわゆる形容詞、形容動詞、名詞述語のテンス形式は、次のようである。

	「赤い」	「静かだ」	「小学生だ」
非過去形	アカキャ	シズカダラ	小学生ダラ
過去形	アカカララ	シズカダララ	小学生ダララ

2）本稿作成までの経過を述べておきたい。まず、600項目からなる全国調査票を金田氏に依頼して八丈方言の報告（インフォーマントは奥山熊雄氏）を得た。その結果は極めて複雑な様相を示していたので、金田氏に直接会っていただいて丁寧なご教示を受けるとともに、金田氏による諸論文も読ませていただくことができた。その後、金田氏とともに11月に現地に行き、奥山氏からご教示を得た。奥山氏は極めて言語感覚がよく、また誠実なお人柄で熱心にお答えいただいた。本稿は金田氏、奥山氏のご協力なしには出来上がらなかったものである。記して感謝する次第である。同時に八丈方言の古い層の記述は、もはや現在83歳である奥山氏なしには不可能に近い段階にあるのではないかと危機感をもった次第でもある。

3）ノモ形式、ノモー形式は、終助詞「カ」を付ければ、選択質問文でも使用できる。

・「酒イ、飲モカ？」「オイ、飲モワ」
　「酒イ、飲モーカ？」「オイ、飲マラ」

また、この形式は、連体用法の場合に使用される。

・ノモ酒（飲む酒）、ノモー酒（飲んだ酒）

なお、ノモワ（ノマラ）系列の中核的形式が＜断定法＞に限定され、＜推量法＞ならびに＜選択質問法＞の場合にはノム（ノンダ）系列の形式が使用されること、＜疑問詞質問法＞の場合にはどちらも使用できない理由を考えると興味深いものがある。沖縄方言が有名であるが、また宇和島方言等多くの方言で＜選択質問文＞と＜疑問詞質問文＞とでは異なる形態論的形式が使用される。（従って、質問文で

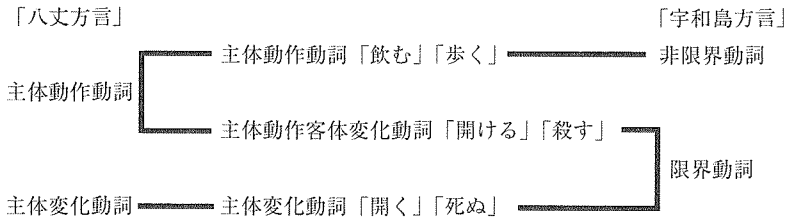
あっても、標準語のように上昇イントネーションが義務的ではない場合が多い。）これは、＜選択質問法＞は＜推量法＞と同様に、出来事の実現の有無が＜話し手において未確認＞であり、一方、＜疑問詞質問法＞は、出来事の実現自体は＜話し手において確認済み＝前提（旧情報）＞であるからだと考えられよう。今後、このような観点からの諸方言における＜質問法＞の実態記述が望まれる。

4）なお、この方言の他動詞には、次のような形式もある。「アケラレテアロワ、ナガサレテアロワ、オカレテアロワ（オケテアロワ）」は主語にガ格をとって＜結果＞を表す。従って、自動詞がある場合にはともに＜結果＞を表す点で等しくなる。（なお、オケテアロワの方がより古い形式である。）

「開ける」	「流す」	「置く」
アケテアロワ	ナガシテアロワ	オッテアロワ
アケラレテアロワ	ナガサレテアロワ	オカレテアロワ（オケテアロワ）
（アッテアロワ）	（ナガレテアロワ）	

5）金田1996によると、「ノミョ」「アケイ」「アキョ」という形式もあり、「ノマロウ」「アケタロウ」「アカロウ」と同じ意味を表す。ただし、＜量的な結果・痕跡＞に限定されるようである。今回の調査でも、この形式を確認することができた。

6）愛媛県宇和島方言では、＜結果・痕跡＞を表すシトル形式が、主体動作動詞においてのみ＜開始後の段階としての進行＞を表し、主体動作客体変化動詞において＜開始後の段階としての進行＞を表すことはない。従って、＜非内的限界動詞＞か＜内的限界動詞＞かの２分類が有効なのであるが、八丈方言では、＜主体動作動詞＞か＜主体変化動詞＞かの２分類が有効であることになる。これは、ひとえに、主体動作客体変化動詞を、主体動作動詞と統合化するか、主体変化動詞と統合化するかの違いである。前者では＜主体の動作＞を捉えているか否かが示差的意味特徴となり、後者では＜変化＞すなわち＜必然的終了限界＞の有無が示差的意味特徴となる。アスペクト的意味と動詞の語彙的意味との相関性には、このような２つのタイプがあり、方言ごとに異なっているのかもしれない。八丈方言のような分割の有り様は標準語と同じであることになる。一般アスペクト論では、＜必然的終了限界＞の有無に注目した＜限界動詞＞＜非限界動詞＞の分類が基本的になされているが、日本語の場合は、＜主体の動作＞か＜主体の変化＞かによる分類原理も重要であろう。＜動作＞にとっては＜開始限界＞が重要になってきて、従って、＜将前＞の意味が主体動作動詞において成立しうるという意味でも。この点については工藤2000 a を参照されたい。



7）金田氏のご教示によれば、ノモワとノモジャ、アケロワとアケロジャ、アコワとアコジャは人称性とも絡み合うモーダルな意味まで同じというわけではない。次のような場合、１人称ではノモジャが自然であり、３人称ではノモワが自然であるようである。

・アラ、ケイモ、ヨウケノ時に、酒イ、飲モジャ。
（私は今日も夕食の時に酒を飲むよ）

・ケイモ、トトウワ、ヨウケノ時ニ、酒イ、飲モワ。
（今日もお父さんは夕食の時に酒を飲むよ）

ノマラとノモージャ、アケタラとアケトージャ、アカラとアコージャの違いも含めて、このあたりのことの精密な記述は今後の課題である。

・熊チャンモ、ウノトキ、キトージャ。（熊ちゃんもあの時来たねえ）
・熊チャンモ、ウノトキ、キタラ。（熊ちゃんもあの時来たよ）

8）金田1990において既に、ノモワ系列の形式は「現在進行」から「未来」へ発展し、ノマラ系列の形式は「現在結果」から「過去」へと発展したのではないかとの指摘がなされている。本稿は、これを受けて、発展経路の＜中間段階＞を設定しつつ、アスペクト対立からテンス対立への転換プロセスを説明しようとするものである。

9）＜結果・現在＞から＜完成・過去＞への発展の中間段階として、＜直接知覚可能な痕跡＞と＜直接知覚不可能な効力＞が区別できるとすれば、＜進行・現在＞から＜完成・未来＞への発展の中間段階として、＜直接知覚可能な将前＞と＜直接知覚不可能な意志＞とが理論的には区別されても不思議ではない。＜痕跡＞は3人称に限定され、＜効力＞は1人称でもよい。だとすれば、＜将前＞が3人称に限定されるのであれば、1人称の場合には＜未来の運動成立の、現在における意志の存在＞ということになるであろう。運動自体は未来に成立するのであるが、その意志は現在にあるというかたちで、未来と現在とが関係づけられるのである。ノモジャ形式とノモワ形式にこのような意味用法がありそうに思われたのだが、場面設定が難しく確認しきることができなかった。今後の課題としたい。

（本稿は1999年度文部省科学研究費「方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究」基盤研究（B）によるものである。本稿を書き上げる過程でも金田氏より多くの教示を得た。記して感謝致します。）

［末筆になってしまいましたが、徳川宗徳先生のご冥福をお祈り申し上げます。］

【参考文献】

飯豊毅一（1959）「八丈島方言の語法」国立国語研究所『ことばの研究』秀英出版
井上文子（1998）『日本語方言アスペクトの動態』秋山書店
大島一郎（1963）「伊豆利島方言の語法（Ⅰ）」『国語学』48
奥山熊雄・金田章宏（1990）「八丈島三根方言　動詞の形態論－アスペクトをめぐって－」『国文学解釈と鑑賞』7月号
――――（1991）「八丈島三根方言　動詞の形態論－過去の「き」をもつテンス形式－」『国文学解釈と鑑賞』1月号
金田章宏（1986）「たずねとうたがい－山形県南陽方言－」『国文学解釈と鑑賞』1月号
――――（1990）「標準語と方言のテンスをめぐって」『国文学解釈と鑑賞』1月号
――――（1992）「八丈島の民話と談話」『国文学解釈と鑑賞』7月号
――――（1996）「連用形の終止用法をめぐって」『千葉大学留学生センター紀要』第2号
――――（1996）「感情・感覚における局面のとらえかた」『国文学解釈と鑑賞』1月号
――――（1996）「八丈方言うちけし動詞の成立をめぐって」鈴木泰・角田太作編『日本語文法の諸問題』ひつじ書房

――――（1998）「現代日本語のなかの係り結び－八丈方言の例を中心に－」『月刊言語』７月号
金水敏（1995）「いわゆる「進行態」について」『築島裕博士古希記念国語学論集』汲古書院
工藤真由美（1999）「青森県五所川原方言のアスペクトとテンス」『国語学研究』第38集　東北大学国語学研究室
――――（2000ａ）「アスペクト表現の地域差」『国文学解釈と鑑賞』１月号
――――（2000ｂ）「文法化とアスペクト・テンス（仮題）」『言語情報科学シリーズ言語科学』第５巻　東京大学出版会
迫野虔徳（1997）「日本語の東西方言差とテイル」『言語学林1995－1996』三省堂
鈴木泰（1999）『改訂版　古代日本語動詞のテンス・アスペクト』ひつじ書房
中本正智（1984）「八丈島方言の文法」『国文学解釈と鑑賞』１月号
まつもとひろたけ（1996）「奄美大島方言のメノマエ性」鈴木泰・角田太作編『日本語文法の諸問題』ひつじ書房
Bybee, J., R.Perkins and W.Pagliuca.1994. *The Evolution of Grammar*. The University of Chicago Press.

くどう　まゆみ（文学研究科教授）